

事例⑥ 5歳児クラス・10～11月

ねらい「子どもの興味・関心に応じた機会をつくり、相談しながら発表や表現をする」

「共感・安心を土台にした新たな出会い—思いを相手に返してみると ワクワクにつながった—」

子どもの姿

5歳児クラスが始まって半年がたち、友だちと思いを共有しながら豊かにあそぶ姿が多く見られるようになりました。また、家庭での楽しかったお出かけの経験を園生活の中で友だちに伝えたり、あそびに経験を生かしたりすることを楽しんでいます。園外の活動では、その場に応じた約束があることを知ったり、他の人と一緒に行動するときに必要なことがあることを学んだりしています。仲間と共に生活をつくり出す力が培われ始めてきています。

近隣の小学校との交流の充実を計画する中で、小学生の学びの機会、年長児の育ちの機会にもつながるよう、小学校教員と幼稚園教諭と共通理解を図りながら、新たな出会いを通じた対話の場面を大切にしています。

子どものあそびや経験

■小動物園で話したよ（チャンス）

フラミンゴの立ち方、真似できる？



わたし、かた足でずっと立ってられないよ～

行動・発言

小学生のお兄さんやお姉さんと共に動物園に行き、一緒に動物を見ました。手をしっかり握ってもらい、5歳児は少し緊張しながらも小学生の話に耳を傾けています。「カピバラって、毛がかたいんだね」「フラミンゴの立ち方、まねできるかな…」小学生が動物の特徴を言葉にして伝えてくれます。そうすると、5歳児の子どもたちも動物の色や形、様子に目が留まります。同じものを共に見ていることで、発見や驚きを共有し、5歳児も自分なりに表現して伝えようとする姿がありました。

■知りたいこと、図鑑にしてくれる！（響き合う）

「リスザルって、どうして名前にリスがつくのかなあ」「色が似ているからかな？」「リスと食べるものが同じだからかなあ？」



5歳児の疑問に、小学生もうなづく様子がありました。「調べたら教えてあげるよ」「図鑑にして届けに行くよ」

「でもさ、どうやって図鑑を作るのかな？」



「ほんとに？小学生ってすごい！」

■お兄さんお姉さんのいる小学校に着いた！
どんな場所があるのだろう（期待）

行動・発言

小学生との約束によって、5歳児たちは小学校への関心が高まってきました。そこで、小学校を訪問することにしました。

校内を案内していただく中で、わくわくする発見がたくさん！「教室のほかにも、いろいろな部屋があるんだね」「図書室は本の中身に合わせて、番号がついているんだね」・・・、小学校への関心が高まります。



ポイント

◎配慮事項（環境構成、保育者の関わりなど）

■「子どもの安心を生み出す土台づくり」への取り組み

- ・小学生との交流、先生とのふれ合い、学校にあるものに実際に手で触れることで、交流活動の中で、場や人、ものへの安心を五感で感じられるようにしました。
- ・また、一人ひとりのペースで交流ができるよう、保育者が丁寧に配慮をし、特に緊張の強い子には事前に説明を丁寧に行います。当日は必要に応じて保護者も同行し、安全基地となることで、無理なく参加できるようにしました。この新たな経験も、日頃から活用している「潤いファイル」を通じて、活動時の子どもの姿を家庭と共有しました。
- ・さらに、就学予定の保護者を対象とした校長先生との座談会を設け、就学を控える子どもや保護者が安心して就学できるよう、小学校の生活などについて見通しをもてるようなお話をいただきました。保護者の方からは、「挨拶を始め、自ら発信することで生まれるやりとりの大切さが分かった」などのご意見から、小学校生活は幼児期の生活が基盤となることを改めてご理解いただきました。



～小学生と触れる・先生と触れる・物と触れる～



～1人ひとりに合った交流、支援の共有～

■図鑑が届いたよ！ 読んだ感想を伝えたい



図鑑「りすざる」のページ

行動・発言

「やったあ！リスザルが載っていたよ」「色もすごい。動物園で見たのと同じ色だよ！」同じ動物を見ていたのに、小学生の図鑑に書いてある言葉や気付きを読んで、自分たちとはまた異なる視点に驚いたり、憧れの気持ちを持ったり、喜んだり、その思いを5歳児同士で伝え合い共有する姿がありました。その気持ちを「小学校に伝えたい」という声上がり、話し合いを行った結果、直接小学生に伝えようということになりました。

あそびや経験が小学校につながるように

十分に自分の思いを表現し、それをじっくり共有し、話し合う機会を大切にしました。個々の子どもの姿や声がクラスの中で拾い上げられ、分かち合うことで、新たな活動・新たな出会いにつながりました。その際、保育者は子どもたちが安心感を基盤に新たな活動に期待が持てるよう配慮をしています。クラス内のやりとりはもちろん、小学生との出会いとやりとりを通し、人と関わることへの興味や自信が持てたようです。
(保育者)

小学校では、入学当初の1年生に対して、6年生がお世話役をしていたり、2年生が生活科のペア学年となっていたりします。その中で、たくさんの言葉をかけられています。その言葉に反応して、楽しく会話や活動が発展する子もいれば、なかなか反応を返すことが難しい子もいます。一人ひとりの気持ちを尊重しながら、自分以外の人の気持ちにも気付き、自分の反応の仕方を振り返ることができるようにしています。
(小学校教員)

幼児期の「安心と挑戦の循環」が、小学校での生活や学びへとつながっている姿が見られます。幼児の声を聴き・自分たちなりに考え・働き掛ける小学生のこの主体的な姿は、かつて自分自身もこうして年上の子どもに関わってもらった経験が基盤となっているからでしょう。就学が「段差」ではなく「なだらかなスロープ」となるための具体的配慮も見られます。保育者と小学校教諭同士で遊びと授業の相互乗り入れを企画したり、そこに保護者も参画できるような働きかけたり、支援が必要なお子さんの経験を「潤いファイル」で文書の共有化を図ったり…こうした取り組みは、子ども一人ひとりや保護者の声が大切に聞かれているからこそ生まれているものです。
(コーディネーター)